

talk! talk! talk! 俳優・宍戸 開さん



俳優

宍戸 開さん

カメラ好きで知られる宍戸開さん。現在まで2冊の写真集を出版するなど、その活動は「好き」に留まらない。俳優としてはもちろん、写真家「五影開」として精力的に活動中の宍戸さん。愛用カメラやエジプト撮影旅行、アマゾンのロケでのお話など話題盛り沢山です。

プロフィール

1966年、東京都生まれ。玉川大学在学中にNHK大河ドラマ「武田信玄」で俳優としてデビュー。映画デビュー作「マイフェニックス」で第13回日本アカデミー賞新人賞を受賞。以後、映画、テレビドラマ、ドキュメンタリー、CMなどで幅広く活躍。最新出演作は映画「青空にシュート！」（2001年9月公開予定）。無類のカメラ好きとして知られ、現在まで2冊の写真集「もっと高く、もっと遠くへ 宍戸開の世界 Nepal1997」（近代映画社）、「マフィッシュ ムシュケラ」（ドリムワークス出版株式会社）を出版。「JR時刻表」（弘済出版社）、「ニコールクラブ」（ニコン）でフォトエッセイを発表。

番組収録には必ずカメラ持参。「チャンスは最大限に活かして撮ります」

ドキュメンタリーなどのテレビ番組に出演するとき、僕はいつも自分のカメラを持って行って、収録の間も写真撮影をしているんです。出演依頼の時点からその希望を伝えてあって、契約書でその許可をもらってるんですよ。多分、こういう条件を付けているのは僕がはじめてじゃないでしょうか。

テレビカメラマンには、スチールカメラが画面の中に映ることを好まない方が多かったので、最初のうちはちょっと嫌がられていましたね。でも最近は、これだけカメラが日常のものになっちゃってるから、あまりうるさく言う人も少なくなりましたね。唯一困るのは、民放番組でスポンサーがある場合です。僕はニコンをメインに使っているから、他のカメラメーカーがスポンサーだと問題なんですよ（笑）。その場合はそのメーカーの小さなコンパクトカメラを借りて使うようにしています。それで画面に映らないところで、コソコソとF4とかを使ってるんです。

なぜカメラを持ってテレビに出られるんですか？

僕は僕なりのやり方で、ブラウン管の向こうにある人間味を視聴者の方に感じてもらいたいです。たとえば、僕が以前出演していた「くいしん坊！万才」でも、見ている方からすれば「おいしいおいしうって食べているけど、実のところどうなの？」という感想を抱かれますよね。

それで、写真を通じて、もっと生の姿を見てもらいたいと思っていました。写真は嘘を付けないですからね。番組収録の合間に撮った写真は、番組内で紹介したり、「ニコールクラブ」にも掲載してもらいました。

テレビ画像はカラーだから、それと変化をつけるためにも、「くいしん坊！万才」での人物はモノクロで撮っていました。収録の待ち時間に一般の出演者の方をちょこちょこと撮っていたんですが、その方にとっては、テレビに映るといっただけの一大イベントですよ。だから僕も記念写真を撮るような感じで、必要のないのに三脚立てたりして撮ることもありました（笑）。

出演者の方ひとつにつき1枚、多くても2、3枚しか撮らないんですが、キャビネサイズで焼いて送ってあげるとすごく喜ばれましたね。モノクロできちんと焼き込んでみると、ふつうのスナップよりずっと味が出ますから。

自分ひとりじゃ行けないような秘境にも仕事で行くことがあるので、撮影のチャンスは最大限に活かさないもったいないですよな。

標準装備はF100×2台＋D1。作品創りにフィルム、おさえにデジタルが定番！

どんなカメラをいつも持っていかれるんですか？

今は、F100をローテーションで2台使うのが通常です。それとデジタルのD1ですね。その3台をカメラバッグに入れて、あとはフィルムバッグを持ちます。

フィルムとデジタルはどのように使い分けていらっしゃるんですか？

メインはフィルムです。被写体の質感を活かしたり何かを表現するといった点では、やはり僕はフィルムが好きなんです。デジタルは、僕の場合はあくまでフィルムで撮った写真のおさえとして使っています。以前はコンパクトカメラを使っていたんですが、デジタルだと撮った写真がその場で確認できるでしょう。それが便利です。でも、確認するための写真なのに、35ミリの写真のくせで、なかなかデータが捨てられないんですよ（笑）。

D1はいつから使っているんですか？

予約して発売と同時に買って、それからずっと使っています。手に入らないんじゃないかってウワサもあったし（笑）。

使い心地はいかがですか？

あんまりデジタルって意識することはないですよ。使ってる、あれ？ これデジタル？ って感じですね。まあ、画角が違うからすぐに分かるけど.....。

フィルムもニコンをメインで使っているんですか？

もうずっとニコンを使っているんで、カメラといえばニコンが当然になっちゃっていますね。カメラは15、6台持っていますが、ニコン以外にはコンタックスを1台と、中判ではマミヤを持っているくらいですね。ニコンはレンズの魅力も大きいですよ。ニコールの85ミリのF1.4なんて、カール・ツァイスかと思うようなまるやかさがありますもんね。



宍戸さんのカメラバッグ。ロケ中は通常でも3台のカメラを持ち歩く。



笑顔に警戒心がみじんもない、愛らしい少女。宍戸さん撮影。



子どもたち。宍戸さんの撮る人物は、いつも自然体なのが印象的。

映画ロケの合間に撮影旅行をしたエジプト。「砂対策には最後まで泣かされました」

宍戸さんは、99年に『マフィーシ ムシュケラ』というエジプトの写真集を出版されました。これは、どんないきさつだったんですか？

最初は映画のロケで行ったんです。『ナイル』という吉村作治さん原作の映画でした。僕は出演がそれほどなかったんで、どうせなら風景などの写真を撮って、プログラムとかに使ってもらえないかなって思ったんです。幸い簡単にOKが出たので、自分で撮影スケジュールを組んで、ロケ地には入っていないルクソールなどをまわってきました。それでプログラム用の写真を撮ったんですが、一度まわってきただけでは物足りなかったんです。で、これはきちんと写真を撮るためだけに来ないだめだぞ、と思い、3か月後に改めて約1月かけてまわってきました。最初はプログラムの写真だけを撮るつもりで、写真集まで出そうとは思わなかったんですが、思いがけず話をいただいて。

エジプトではとくに何を撮ろうと思われたんですか？

エジプトって、どうしても遺跡のイメージが強いじゃないですか。だから、生きているエジプト、エジプトの日常を写したいと思いました。

だから知らない町で、最初はカメラを持っていかないで歩いて、この時間に行けば勤め帰りの人がいるなとか下調べをして、いいシーンに出会えるチャンスを狙いました。まめに足を運ばないと、いい瞬間を逃しちゃいますから。今でも知らない土地に行くほど、何度もロケハンして下調べしていますよ。それから、自分の撮りたいものは何かをきっちり絞らないと、写真は撮れないと思いました。枠を広げてもいいけど、的は決めないとだめですね。

撮影で苦労されたことはありますか？

もう、砂対策には最初から最後まで泣かされましたね。裏蓋とレンズマウントから入りこむ砂が曲者なんです。レンズ交換やフィルムチェンジをするときに、どうしても風にのってきた細かい砂が入りこんじゃうんですね。それで一度砂が入ると、フィルムにビシッって傷が入っちゃうんです。それも一本だけじゃなく、何本か続けて被害が出る。だからカメラにシャワーキャップをかぶせるののもちろん、できるだけ台数を持って行って、極力、裏蓋を開けたりレンズを換えたりしないようにしました。でも、やはりそれで間に合わないこともありますよね。そのときは何カットかダメになっちゃいました。

カメラは壊れなかったですか？

カメラ自体は壊れませんでした。トラブルもなかったですよ。ニコンのカメラは優秀ですよ。僕は頑丈さという点も含めてニコンのカメラをいちばん信頼してますよ。



エジプトを撮ったF100。「ここに入ってくる砂が曲者なんです」。

アマゾンでは暑さ、湿気、蚊に閉口！「このサルを撮ったのは僕がはじめてかも」

お気に入りの写真ということでお持ちくださったのは、これはアマゾンで撮影された写真ですね。

これもやはり、テレビのドキュメンタリー番組でロケに行ったんです。アマゾンの「黒い川」「茶色い川」の交わる場所に住むという、フミリスというサルを探しに行ったんです。

楽しそうですねえ。

うーん。もう二度と行きたくない(笑)。暑いし蚊はいるし……。1日100箇所くらい蚊にさされるんですよ。本当にいい時期にいかないダメですね。僕が行ったときは、夜になっても気温が下がらない、べちょっとした気候の時期でした。生まれてはじめて「ああ、外に遊びにいきたくないな」という気分を味わいましたね。

ジャングルのなかでは、スコールにも悩まされました。真黒な雲がかかってくるんです。見ていて、来る来る来る、って分かるんですが、もうちょっと大丈夫かな、と思っているところにドワーッと雨が来る(笑)。

これが目的のサルをおさめた写真ですか？

そうです。ISO100をですね、4段増感しています。手のひらサイズくらいしかないサルですから、トリミングしてプリントしないと見られないですね。でもこのサルを写真におさめた人って、あまりいないと思いますよ。僕がはじめてかもしれない。



手のひらサイズのサル・フミリス。撮影の苦労がしのばれる一作。



ものおじせずに笑う子ども。間近に見ることで魅力がさらに引き立つ。

人物の写真もすてきですね。

人物の場合、だいたい僕は標準で寄って撮るんです。この子も、瞳の中に僕が見えるくらい寄って行って撮っています。

本当に宍戸さんは、あらゆるタイミングを逃さずに写真を撮っていらっしゃいますね。

カメラ好きで知られる穴戸開さん。現在まで2冊の写真集を出版するなど、その活動は「好き」に留まらない。俳優としてはもちろん、写真家「五影開」として精力的に活動中の穴戸さん。愛用カメラやエジプト撮影旅行、アマゾンのロケでのお話など話題盛り沢山です。俳優という、いわば撮られる対象としての「穴戸開」がもつもう一つの顔は、撮るのが好きでたまらない、写真家「五影開」。普段愛用しているカメラはF100×2台とD1。「撮られる側の気持ち分かるから、被写体を大切にしたいんです」

写真（＝静止画）、映画（＝動画）、両方面に渡って活動する穴戸さんならではの、写真家としての意気込み、フィルムに対するこだわり、さらにディープに切り込みました。

子どものころは“カメラがおもちゃ”。写真を始めようと思ったのは学生のとき。

カメラや写真は、子どものころから身近な存在でした。

家には父親を撮りにくるスチールカメラマンがしょっちゅう出入りしていて照明道具とかも見慣れていましたし、母親が、たぶんFMだと思うんですが、マニュアルの一眼レフを持っていて、そのシャッターを巻く音とかがとても好きでした。コダックの黄色い箱からフィルムをびーっと引き出して遊んだりもしました。子どものころはカメラはおもちゃだったという意識が強かったですね。

中学・高校時代はスキーに夢中になっていて、その白銀の世界で考えたんです。この、空の青、雪の白、岩や木の黒だけの世界を何かに残したいなあ。絵を描こうか、写真に撮ろうかと。

でも絵は時間がかかるし、写真にはお金がかかる。だから、仕事をするようになって、自分でお金を稼げるようになったら、カメラをライフワークにしていこうと思ったんです。

そもそも、カメラも映画と同じ映像の分野ですよ。35ミリは映画のフィルムから来ていますから。それを両方やっていくのは僕にとってすごく自然なことなんです。

「写真は動きを封じ込めるもの」。止まっているからこそ、見えるものがある。

穴戸さんにとっての、映画と写真の違い、つまり動画と静止画の違いとはなんですか？

僕は二つともあまり区別していないんです。静止画、つまり写真は動きを封じ込めるものであって、それで説明がつかない場合は動画で撮ればいいと思っています。

でもやっぱり、じっくり考えたい、ゆったりと振り返りたいときは、静止画がいちばん適していると思いますよ。視覚的に止まっていないと、理解できない部分ってあると思いますし。

風景にしたって、止まっているように見えて、実は時間とともに変化していますよね。それをひとつの絵に封じ込めたいんです。文章でも絵でも、表現方法は何でもよかったんですが、僕が選んだのが写真でした。一見簡単そうなのに、実は奥が深いし。



穴戸さんの写真は、何げない風景にも一つのストーリーを感じる。 アマゾンの「黒い川」と「茶色い川」が交わるころ。

写真はどこで学ばれたんですか？

最初は、写真学校で勉強しようかなと思ったんです。でも、俳優の仕事が忙しかったし、それだったら現場でプロの方に教えていただいたりして、ともかく自分で勉強しなきゃと思っていました。

で、カメラを買いに行くんですよ。お金を持ってカメラ屋さんに行って、カメラを買うはずなのに、なぜか引き伸ばし機を買っちゃったりして（笑）。

露出も最初は苦労しましたねえ。分かれぼどうってことないんだけど、最初のうちは雪山を撮ったはずなのに真っ黒になっちゃって、「どうして？ これカメラでしょう!？」って。

実践で覚えるって感じですね（笑）。始めの頃はいろいろ試されてたんですか。

常にいじってましたね。楽しかったですよ。撮ったときのデータを全部メモしておいて、被写界深度を調べたりして。

勉強熱心ですね！

好きだから自然に覚えちゃうんです。いくら理論で覚えていても、実際には太陽も動いていくし、環境が変わりますよね。だから、自分でやって失敗しないと覚えられなかったんです。

今でもときどきやりますが、カメラ雑誌の撮影講座を読んで、夜景を撮るのに、露出はこう、反射率はこう、というのを見て、わざわざ同じものを撮りに行ったりもします。こういう実験は、最初カメラをはじめたときも、ほんとにしょっちゅうやってましたね。

「被写体の内面を100パーセント活かしたい」。フォトネームに秘められた写真家の意図。

穴戸さんのお名刺には、「俳優 穴戸開」と並んで「写真家 五影（いつかげ）開」のお名前がありますよね？

こだわる必要もないかな、とも思ったんですが、やはり、「穴戸開」という名前からくる先入観が写真を見るときに邪魔にならないように、という配慮ですね。どうしても穴戸開という名前では、役柄とか、コマーシャルの印象が強いと思うんです。

あと、自分が俳優だから、撮られる側の気持ちがわかるんですよ。たとえば、篠山紀信さんに写真を撮ってもらおうとするでしょう。そういうときは「写真を撮られてる」というよりも「篠山紀信に撮られている」という緊張感のほうが多いと思うんですよ。

僕は、撮られる人の内面を100パーセント活かした写真を撮りたいと思っているんです。だからそのときに、被写体に対して「穴戸開はこういう人だ」という先入観を与えたくないと思っています。

「五影」という名前の由来はなんですか？

五感をあらかず五、明るさの五段階の五、あとは僕の家族が五人だとか……。五というのが僕のキーワードなんです。

いちばん大きいのは五感という意味合いですね。写真のなかに、この五感を常に封じ込めたいという願いがあるんです。明るさにしても、それだけ階調があれば写真として見飽きないですよ。

影っていうのは、明るさと暗さの二面性です。人間にはいい部分と悪い部分がありますよね。写真は光で撮るものだけど、光があるからには影があるというかな。だから五感も十感にまで広がるんじゃないかと（笑）。

最初はね、ファイブシャドウズ、っていう言葉で思い付いたんです。それで日本語になおしたら五影かなって。

なるほど、五感を封じ込めた写真という意味なんですね。実際にはどんな写真がお好きなんですか？

僕はフィルムではコダクロームが好きなんです。それは外式が好きだからというより、肉眼に近い、シャープな印象が好きなんです。だから、コダクロームで撮った写真には自然に眼がいてしまいます。逆に、肉眼以上にきれいな写真はあまり惹かれないですね。桜の写真とかでも、ピンクが濃すぎたりするのは「層色か？ または造色しているの？」って思っちゃう。



次から次へとカメラのエピソードが出てくる穴戸さん。話は尽きない。

基本的には、自然光を活かした、余分なものない写真が好きです。フィルターにしても、僕はだいたい保護フィルターくらいしか使わないですね。味付けしたいなと思ったときには、ストッキングを使ったり、レンズに息を吹き掛けてソフトフォーカス効果をねらうくらいですね。

今まで撮られた写真では、どういうものがお気に入りですか？

基本的には風景が多いですね。モノクロをやっているせいもあるかもしれませんが、被写体としては空とか雲が好きです。一見止まっているように見えて、常に変化している被写体ですから。

写真を撮っているうでの意外なメリット？「僕はやっぱりフィルムが好きなんです」



店番をしているらしき少女。興味深そうに穴戸さんを眺めている。



ブラジルの動物園で。あらゆるチャンスに穴戸さんはシャッターを切る。

穴戸さんは、俳優としては撮られる側、写真家としては撮る側ですよ。それがお互いに影響をおよぼすことはありますか？

撮るときには、撮られる側の気持ちが分かるというのは大きいと思いますよ。たとえば（突然カメラを向けて）こうされると、ドキッとして緊張しちゃいますよね。その緊張感が分かるから、僕は被写体になる人の気持ちは大事にしたい、うまく活かしたいって思っています。

逆に、俳優の仕事をしていて、カメラの知識が役にたつこともありますよ。たとえば、35ミリのフィルムで、50ミリのレンズを付けて、絞りは5.6で、3メートル離れているとしますよね。そのとき、どのくらいの深さで自分にピントが合っているか、自然と頭にイメージできるんです。

画角の幅についても意識していますね。「そこを横切って」というときは、真っ直ぐ歩かずに、ちょっと弧を描くように歩くんです。でも、これがファインダーの中ではまっすぐ歩いているように見えるんですよ。それで、最後に顔がちらりと見えたりしてね。

また、撮影で「撮り直し」ってことになったとき、何が失敗だったのか分かるというのはありますね。演技面ではない失敗だと、何が悪いのか言ってくれないディレクターもいるので、そのときは自分で推理するしかないんです。「大事なセリフ言うときなのに、ちょっと陰になっちゃっている部分にいたかなあ」「立ち位置は大丈夫だと思うから多分音声かな」とか。

そういったことを判断して、「よし、大勢が画面のなかにいるから、ちょっと陰の部分にいて、大事なセリフを言うところだけ明るいうちに出てみよう」とか試したりするんです。

映っている範囲を最大限に活かしたほうがいいですから、それが自然と分かって得しているところはあるかもしれませんね。でも、お芝居をしているときは、あくまでお芝居だけに集中していますよ。

意外な活かし方があるんですね。

まあ、活かせるほど映画が盛んな時期じゃないのが寂しいところなんです。

日本ではこれだけ電子機器が進んでいるのに、機器というハードウェアが先行して、作品がついてきていない気がします。たとえば映画が好きな人でも「じゃあ最近おもしろかったのは何？」と聞かれて、日本映画のタイトルを挙げる人は少ないんじゃないかと思うんですよ。

日本映画は、親父の時代が黄金期だったとしたら、今は低迷期であり、過渡期という感じですよ。

僕はやっぱり、フィルムがいちばん好きなんです。ビデオを否定するわけじゃないんですが、ニュースはともかく、ドラマなどのお芝居では「なんで肉眼に近いフィルムでやらないの？」って思っちゃうんですね。たとえばアメリカでも、XファイルとかERとかはきちんとフィルムで撮っているんです。

だから僕は俳優としても、皆さんにフィルムの良さをどんどん知ってもらいたいし、そのために努力したいと思っています。

でも、日本映画が停滞しているといっても、安心してるところはあるんですよ。だって映画も映像も絶対になくなりはないジャンルですから。いくらデジタルが進化しても、銀塩フィルムは絶対になくならないだろうと僕は思っています。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.